

来れば、それだけ體罰を與へる必要が減じて行く譯であります、勿論子供の性質に依つては、さう云ふ叱りやうもする必要のない子供もありますけれども中には、なか／＼暴い性質の子供もあり殊に男の子には、それが多いのであります。さう云ふ子供に對しても、無暗に怖がらしたり、親の短氣から暴い言葉を使つたり、考へなく子供の頭へ手を上げるやうな事をしないで、それは極く心要な場合だけに止めて置いて、而も、それをする時は一度で十分聞き入れるやうにせなければならぬと思ひます。強い叱りやうを再び續けなければならぬことになりますと、それだけ叱りやうの程度が高くなつて來る譯でありまして、遂には、體罰が普通の叱りやうになつて仕まうやうな事がなことも云へないと思ふのであります、以上は家庭の育児上に心付いたまゝを申し上げた譯で御座います。(文責在記者)

## 哺乳兒榮養法

本間辰藏

哺乳兒期即ち生後一年間は尤も死亡數の多き時期でありまして、其原因は大部分胃腸の病であります、然らば胃腸の病の原因は何かと申しますと、食物即ち乳汁の良否と、授乳法の不適當とにより、ます、依て二三の書物を參考として、哺乳兒營養法に就て少しく申上る事と致します。

扱て小兒が初めて生れますと、三つの點に於て大變化を來します。即ち

一、哺乳 母の胎内に居る時は胎兒の營養分は母の血液より受け胃腸は働く必要もなかつたものが生後は今迄母子の血液交通道でありました臍帯が切られて、營養分の供給を斷たれます。そこで口より營養分即ち乳汁を飲んで消化しなければならぬ事になります。

二、體溫維持 母の胎内に居る時は常に一定の溫

度の内に安居してゐたものが生れると忽ち外界の冷い空氣に晒されて冷却されます故に、自分の體温を維持する爲め、營養分をとり夫を酸化して温を發生しなければなりません殊に小兒は大人の割合に身體の表面が廣いものですから蒸發が劇しく從つて體温が冷却し易い。従つて營養分を比較的澤山取らなければなりません。

一、呼吸 母の胎内にある時は呼吸といふものはありません。生れると直ぐ呼吸をはじめ酸素を取り炭酸を呼出します。

以上述べました通り、これ迄より著しき變化を來すばかりでなく身體の割合に營養物を澤山とりますから營養法と體温維持は尤も注意を要します。

申す迄もなく哺乳兒の必要缺くべからざる食物は母乳たる事は古も今も洋の東西を問はず經驗上明瞭なる事實でありまして、統計學上は勿論生物學や醫學上から申しても學問が進歩すればす

る程母乳の優秀なる事が愈々證明されます。

夫故第一に人乳營養法に就て述べ、第二に母乳で營養不可能の場合を述べ終りに人工營養(即ち牛乳)を述べます。

### 母乳營養法

先づ小兒が生れますと直ちに睡眠しますから半日乃至一日間其儘にして置きます。泣けば渴に對して蒸溜水又は煮沸水を少し甘くして與へます。

サツカリン砂糖等を加へます、又稀薄の番茶を與へても宜敷ございます。通常初め二十四時間は乳は與へませぬが母乳は與へても差支へはありませぬ、生後三四日間に八十多位(三百瓦)減るのは普通でありますから母乳と薄き番茶位で宜敷うござい

ますが、若し夫れ以上減する様なれば、人工營養即ち牛乳を併せ與へます、但しこの場合でも小兒に母乳を飲ましめ分泌を促がさなければなりません。

四週間は吸はしてもどうしても分泌充分ませぬ、四五週間は混合營養即ち牛乳と人乳の兩方を養

ふ様にします。

若し小児が孱弱い爲め吸乳力弱く、その爲め乳汁分泌不十分のものは、乳母を傭ひ弱き小児には乳母の乳を飲ましめ、乳母の小児には母の乳を吸はしめ、分泌を促がしめるとよく分泌する様になります。そして弱き小児も乳母の乳の爲めに發育して強く吸ふ様になります。

エブスタインといふ人の言に母乳營養を適當に行へば乳兒の消化不良に罹る事は極めて稀で、小兒は規則通に發育し人を煩はす事なく、恰かも家に小兒の居るや居らぬやわからぬ如く靜なりと申しましたが實にその通りで、消化不良は多くは營養法の不適當によります。我國の風習で生後まぐりを與へる事の害は知れ渡つて居りますから述べませぬ。

小兒に乳を與へる時の注意は乳嘴を口へ入れる時鼻呼吸を妨げない様にせねばなりません。添乳しながら乳房で窒息死せしむる事は往々ある事

あります。

乳を與る時乳嘴の消毒は餘り心配するに及びませぬ。一旦煮沸したお湯で洗へば宜うございませぬ。營養を規則正しくするには乳を與へる回数を多過ぎぬ様注意せねばなりません。往々二時間毎に與へますが之は多過ます、凡そ健康の乳兒の胃は一時間半乃至二時間半で空虚になる事と、消化に際しては乳汁が胃に入る前に胃が全く空虚でなくはいけない事を知れば、頻回乳を與へる事の有害なる事は論を俟ちませぬ。

哺乳の回数は六回或は五回を適當と致ます假令  
午前六時—十時—午後二時—六時—十時—午前  
二時

尤も必しも規定に拘泥するには及びませぬ。睡眠中の如きは醒めるを俟つ方が宜うございませぬ。飲ませる時は満腹して睡眠する迄與ます。普通滿腹する迄には大凡十五分乃至二十分間かゝります。而して初めの五分間に大部分飲むものであります。

フエールと云ふ人の實驗によると百九十二瓦の中  
初め五分間に百十二瓦次の五分間に六十四瓦終の  
五分間に十六瓦飲んだといふ事でありませぬ。

小兒が乳嘴を含み居るも吸はぬ様になり、只口内  
で玩ひ居る時は取去らねばなりませぬ、小兒が乳  
を飲で居る間はキエツ／＼と飲込む音がしますか  
らわかります。小兒が乳嘴丈け吸ふて居る時は飲  
込む音は聞えませぬ。

小兒があたりまへの時間丈け飲みても満腹せぬ  
時は、不満足のため泣きます。この時若し乳房  
が空虚になり居れば乳汁の量の不足の證據であり  
ます、飲みたる量は小兒の哺乳前と後の體重を測  
れば其差でわかります。一方飲干して不足なれば  
他の乳房につけますが、通常は一度に一方丈け飲  
ませます。一度に兩方少しづゝ飲ませますれば兩  
方も充分飲盡されぬ爲め、乳汁鬱滞を起し、乳  
汁の分泌が不足になる事があります。

一回の哺乳の分量は同一の小兒で同一日の中で

も差はありますが、平均は大凡左の通りであります。

フエールと云ふ人の調査によれば平均一回量

生後第一週 凡二勺(四〇―五〇瓦)

同 二週 凡四勺(八〇―九〇瓦)

同 三―四週 五勺餘(八五―一一〇瓦)

同 五―八週 六勺餘(一一〇―一二〇瓦)

同 九―十二週 凡七勺(一二〇瓦)

同 十三―十四週 七勺餘(一四〇瓦)

同 十七―廿週 八勺餘(一五〇瓦)

同 廿一―廿四週 凡九勺(一六〇瓦)

日本人の小兒では瀬川博士が御自分の小兒に就  
て測りしもの及京都の平井博士が乳兒の胃の容積  
を測りしものがあります、大同小異ゆゑ略しま  
す。

以上平均數を掲げましたが實際は一回に三百瓦  
或は夫以上飲む小兒があります。而して胃の容積  
より澤山飲みますが之れは乳が胃に入れば固まり

水分すゐぶんと分わかれまして、水分すゐぶんはすぐ腸ちやうの方ほうへ行ゆきま  
すから差支さしつかへありません。

カメーレル。フェール兩氏りやうしの調しらべた所ところによれば、  
健康けんかう哺乳ほにゅう乳にゅうの一日いちにちの哺ちゅう乳りやう量りやうは(平均へいきん)左記さきの如ごと  
であります。

第一日 ○ 第二日 九十瓦 第三日 百九十

瓦 第四日 三百十瓦 第五日 三百五十瓦

第六日 三百九十瓦 第七日 四百七十瓦

第二週 五百瓦 第四週 六百瓦 第八週 八

百瓦 第十四週 八百五十瓦 第廿週 九百瓦

併しかし子こ供どもには大小たいせうがありますから近來きんらいは小兒こどもの  
體重たいじゆうから略飲りやく量りやうを定さだめることになつて居をります。  
即すなはち

三ヶ月迄は 體重二百五十瓦ニ付 凡およソ八勺

六ヶ月迄は 同 稍少量

九ヶ月迄は 同 六七勺

換言くわんげんすれば生後せいご第一週だいいしゅうは體重たいじゆうの五分ぶんの一、二ヶ  
月げつより六ヶ月迄は體重たいじゆうの六分ぶんの一乃至七分ぶんの一。

夫それより以後いごは八分ぶんの一を適當てきたうと致いたします。  
以上いじやう申上まをしあげることひつくるめに要えうするに哺乳ほにゅう回數かいすうは  
六回むいとし一回くわい十五分間位ふんかんごのみ飲のみませ一方ほうの乳ちゅうを飲干のみほ  
した後のちに他たの乳房ちゅうぶへ移うつるといふにあります先づ外觀ぐわいけん  
上異常じやうかうなければ飽あく迄飲までませて差支さしつかありません。

○子 守 唄

(若き父つくる)

おちいちゃんにおばあちゃん  
おちいちゃんばやまへ  
おばあちゃんばざあへへ。  
もゝがながれた  
そのもゝわつたれば  
あかちゃんがつまれた。  
わん／＼にきやつきや  
けん／＼つれて  
きびだんごこしらへて  
おにがしまへいきました。

——『せんぞやまんぞ』の節——